様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０８２５

研究課題名（和文）米国の高齢者世代の住環境変化とライフデザインに関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study of Changing Living Environments & Well-being of the Elderly in the US

研究代表者
佐野　眞理子（Sano, Mariko）

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：８０２０６００２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,200,000円、（間接経費）　660,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，申請者が1980年代から継続的に調査を行ってきた米国の2地域において，1990年代から顕著に見られる高齢者用介護施設の多様化に着目し，住環境選択を中心とした高齢者世代のライフデザインの変化と継続性を，当該地域の福祉政策や，地域社会の文化的･社会的変化の文脈の中で検討した。福祉政策が地域社会における長期介護支援に重点をシフトしていく中、高齢者にとっては自立と介護の両立を図る機会が増加した一方で、新しい選択肢の享受には、疾病の度合いや経済状況、民族文化的背景が大きく影響することが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In a "Super-Aging Society" with a rapidly aging population and declining fertility, providing the elderly with a suitable living environment is critical for them to maintain independent lives and to receive necessary care as their health and mobility decline. This study focuses on the growth of new types of care facilities in lieu of more conventional nursing homes in two research sites in the US which I have been continuously studying since the 1980s. How does the development of community-based residential facilities and residential care apartment complexes affect the life design of the elderly?
The study examines the diversification of care facilities in the context of longitudinal, social, and cultural changes of the areas and analyzes changes and continuity in the life-design and well-being of the elderly.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：老年人類学　文化人類学　アメリカ研究　ライフデザイン　民族学　老後の住環境

１．研究開始当初の背景

申請者は，米国カリフォルニア州サンフランシスコ近郊と，ウィスコンシン州の小都市（研究上の仮称，リヴァ-フロント市）において，1980 年代のヨーロッパ系アメリカ人高齢者世代の生きがい形成過程の変化を，民族誌的調査と歴史資料の分析で明らかにしてきた（藤田　1999；Sano & Sano　2001；佐野･藤田 2001)。また，2003，2004 年に当該地域で追跡調査を行った。この研究から，住環境選択に関する価値観として，高齢者にとって，子ども世代との同居よりも，自宅や高齢者用アパートでの一人暮らしを望み，それが，自立の象徴であった。ナーシングホーム（特別養護老人ホーム）は，彼らにとって，ゴフマンが言うところの「トータル・インスティテューション」であり，自分の身の回りのことも，判断もできない状態を意味し，可能な限り，避けたい選択肢として語られていた。この価値観は追跡調査においても，顕著に見られた。同時に，慢性疾患や認知症を患うことへの恐れや一人暮らしの不安への対応も大きな関心事であったことが明らかになった。

当該地域では，1990 年代後半から 2000 年代には地域居住型施設や，介護サービス付きアパートといった，住居と介護が混在した新たなケアホームが建設され，インターネットの情報によれば，その数は，年々増えている。中には，広大な同じ敷地内に，独立･自立型アパート，軽度のケアホーム，重度の介護施設を併設し，住居者は，介護のニーズに応じて，移転するという生涯型介護施設も顕著に見られる。高齢者にとって，住環境の選択肢は増加したことがわかる。

高齢者用住環境の多様化がどのように彼らのライフデザインや老後の生きがいに影響を与えるのかを検討することが課題である。

２．研究の目的

高齢期が長期化する現代において，人は，自立し，意義ある生活をおくることと共に，必要な介護を受ける安心感を求める。では，人は，どこに，どのような基準で「老いの住みか」を選択するのであろうか?　本研究は，申請者が 1980 年代から継続的に調査を行ってきた米国の 2 地域において，1990 年代後半から 2000 年代に顕著に見られる高齢者用住環境の多様化に着目し，住環境選択を中心とした高齢者世代のライフデザインの変化を，当該地域の福祉政策や，地域社会の文化的･社会的変化の文脈の中で明らかにすること，さらに，日本の状況との比較によってアメリカ文化･社会の特性を明らかにすることを目的とする。具体的には，

(1)高齢者が，老後の住環境を選択する際の要因を明らかにする。

(2)高齢者は，老後のライフデザインをどのように描き，住環境の多様化がどのように影響するのかを明らかにする。

(3)住環境の多様化とその影響を，当該地域社会全体の社会･文化的変化の文脈で明らかにする。カリフォルニア州と，ウィスコンシン州の 2 地域社会を比較し，当該問題に関する多様性を明らかにする。

(4)日本の状況と比較することによって，アメリカ文化･社会の特性を明らかにする。

(5)これまでの研究成果と，の分析をあわせて，アメリカ人の老後のライフデザインの変化と持続性を明らかにする。

３．研究の方法

(1)　文献とインターネットによる調査

1990 年代以降，当該地域に起こった文化的･社会的変化について整理し，要点を明らかにした。高齢者に関する法制度や社会福祉保障制度，年齢別･性別人口の増減，高齢者向け住宅や介護施設の種類，支援内容，数量的変化，消費経済の拡大と，ショッピング・モールや全国的な大規模店舗の当該地域への進出，介護に携わる人口と職種の変化，アジア系新移民の修学･就労状況を中心とした。

(2)　現地調査

①カリフォルニア州サンフランシスコ近郊（2010；2011）とウィスコンシン州リヴァ-フロント市（2011；2013）で，現地調査を行った。当該地域の福祉施設，介護施設，教育機関等で，地域社会の変化や，老後の住環境の選択肢とそれぞれのメリット･デメリット，高齢者の自立性やケアに関するハード面，ソフト面での工夫や取り組みについて，参与観察，聞き取り調査と資料収集を行った。

②また，当該地域の老後の住環境の状況の変化をアメリカ全体の変化に相対的に位置づけるため，米国の大規模リタイアメント・コミュニティの発祥の地とされるアリゾナ州サン・シティ歴史博物館や，南カリフォルニア地域での現地調査を行った。(2012）比較対照として，山口県の高齢者施設で，参与観察と担当者に対する聞き取り調査を行った。（2011,2012）

(3)　分析

収集した地域社会における変化の資料を，前回の調査で収集した詳細な民族誌的記録と照らし合わせ，通時的・共時的に継続と変化のパターンを分析した。また，高齢者の住環境施設を介護内容，自立性とアクセシビリティ，費用の観点から類似性と相違性を分析した。

４．研究成果

(1)　コミュニティの変化

全米ネットワークを持つチェーンストアを中心とした大規模商業地帯の建設。消費経済が拡大する一方で，この地域独自の店舗，企業の閉鎖が多く見られた。「家族農場」は，大規模化･企業化するものと，廃業するもの

に二分化した。ヨーロッパ系アメリカ人の町だったのが，ラオス，カンボジアからのモンの人々を 1980 年代後半から 1990 年代にかけて受け入れ，ポーリッシュ･タウンのイメージやシンボルが希薄化した。

(2)　高齢者センターの機能の変化

高齢者センターの機能は，高齢者のソシアル・ニーズを満たすことから，在宅長期介護の対応へと，重点をシフトしてきたといえる。

①第 1 段階：　1970 年代後半から 1980 年代前半。高齢者センターを中心として，高齢者の社会的ニーズを満たすために，活動の場所，交流の場所，そして，ボランティアとして活躍する場所を提供することだった。当時は，ミール(昼食)プログラムが大きな位置を占めていた。

②第 2 段階:1980 年後半から 1990 年代前半。高齢者福祉局のサービスが，在宅における長期介護を支援するサービスに重点をシフトしたことである。このことによって，たとえば，ミール・プログラムも，ミール・サイトで提供するものよりも，家に運ぶ宅配食の占める割合が大きくなってきた。

③第 3 段階：1990 年代後半～現在。州の方針に対応するためのサービスの再編成。約 40 種類の在宅介護用のプログラムをファミリー・ケアに 1 本化したこと，対応する人々が高齢者に限定されず，障害者も含むようになったこと，保健福祉局が実際のサービスを提供する役割を担うことに対して，高齢者福祉局の方は，高齢者と障害者のためのリソースセンターとして，情報提供や，受給資格のアセスメントを担うようになった。

(3)　高齢者のライフスタイルの変化

一般的に高齢者は，その前の世代よりも，健康で活動的であり，フィットネスやウォーキング等の健康増進，健康寿命の延伸に努める。経済的なゆとりがあり，背景として女性の労働参加が増加し，自分自身の年金を持つことから，老後の選択肢が増える。また，強制的定年退職制度が撤廃され，自分の退職時期をプランニングすることが可能となった。社会が多様化，情報化するに連れて，社会の中で高齢者の受け入れが進み，退職後の過ごし方の選択肢の拡大と多様化が見られるようになった。大学や公立学校で高齢者向けの教養講座が開講され，健康で元気な高齢者の活動場所は，高齢者向け施設に限定されない。しかし，「人の役に立ちたい」，「人と関わる機会を持ちたい」というボランティア精神は依然，健全である。

(4)　住環境の多様化

従来の自宅と，全面的介護が必要な高齢者を対象としたナーシングホーム（特別養護老人ホーム）の他に，高齢者向け施設が増加し，多様化した。　高齢者にとって，住環境の選択肢は増加したことが，それぞれにメリット・デメリットがある。

①高齢者用アパート

配偶者の死別等により一軒家の維持が困難になった高齢者は，高齢者用のアパートに移り住むことが多い。身の回りのことが自身でできることが入居条件である。低所得者層を対象としているため，所得制限がある。

②介護サービス付き施設

食事・着替え・入浴といった身の回りのことを自身行うことが困難になった高齢者を対象とした介護サービス付き施設が増加した。買い物やシニアセンターでのプログラム参加を支援している。医療的ケアは行わない。認知症の高齢者を対象とした施設を併設している場合が多いが，こちらは建物の施錠など徘徊防止策が講じられていて，それぞれが独立して運営されている。

③生涯型段階性介護施設

比較的広大な同じ敷地内に，独立･自立型アパート，軽度のケアホーム，重度の介護施設を併設し，住居者は，介護のニーズに応じて，移転するという生涯型介護施設がある。カリフォルニア州の調査地では 80 年代にもすでにあったが，リヴァーフロント市では最近になって設立された。

最初は，自立度・自由度を保ちながら，介護ニーズの増加に伴って同じ住環境の中で移行できるという「老いの住処」としての安心感がある。しかし，高額なので，入居者は，高所得者層に限られる。自宅を売却して入居する場合が多い。

(5)　住環境選択における要因

①本研究で，明らかになった高齢者が老後の住環境を選択する際の主たる要因について述べる。

これまでの研究からも，高齢者は，可能な限り，自宅や高齢者用アパートでの一人暮らしを望み，それが，自立の象徴であった。ナーシングホーム（特別養護老人ホーム）は，彼らにとって，ゴフマンが言うところの「トータル・インスティテューション」を意味し，極力避けたいと考えていた（藤田　1999；Sano & Sano　2001；佐野･藤田 2001)。この考え方は基本的には変わっておらず，家族からの買い物等の支援を受けながらも同居は好まない。

②住環境の選択肢が増えたことで，生涯型段階性介護施設への転居を新しいライフスタイルとして高齢者自らが選ぶことが多い。自立と介護の両立が図ることができるからというのが主たる理由である。また，高額であることから，高齢者のステータスを示すことにもつながる。一方，介護サービス付き施設への転居は，身体的衰え，介護ニーズの高まりから，高齢者自らというよりも，医師や家族の勧めによるものが多い。高齢者にとっては，ライフスタイルのダウンサイジング，すなわち，家，持ち物，活動範囲の縮小を意味し，人によっては適応が困難な場合もある。

③住環境選択が増えたのにもかかわらず，独自の高齢者ケアを維持しているのが，モンの人々である。モンの高齢者は，介護施設には転居せず，同居する家族が老後のケアを行っている。彼らは，アイリスと呼ばれる，公的サービスを自ら組み合わせて，独自のケアプランを作るプログラムを利用している。このプログラムでは，家族が介護者養成研修を受け，介護者として認定され，自分の親の介護者として雇用されることが可能である。このように公的制度を利用しながら，外部機関や施設に頼らず，家族内ケアを維持している。

(6)　日本との比較
老後のライフデザインでは，自立と介護のバランスをどのように両立させるかということが高齢者にとって大きな課題である。その点では，介護施設の多様化は，高齢者にとって選択肢が増える。しかし，新しい選択肢の享受には，疾病の度合いや経済状況，民族文化的背景が大きく影響することが明らかになった。日本でも介護施設の多様化は進んでいるが，経済格差，疾病の度合い，認知症の有無をどのように組み入れていくかが課題となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　7 件）
1.Mariko Fujita-Sano, “Changes and Continuity in the Well-being of American Elderly People and Roles of Senior Centers,” in Nanami Suzuki(ed.),”The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies,” Senri Ethnological Studies (SES) 87:79-109. National Museum of Ethnology.
2014.（査読有）

2.佐野（藤田）眞理子,「文化と老後の生きがい」『生きがい研究』18 巻，4-13 ページ，2012.　（査読無）

3.佐野（藤田）眞理子,「多様性理解が育むウェルビーイング：高等教育のユニバーサルデザイン化と人材育成」『国立民族学博物館調査報告(SER)』102 巻，7-29 頁，2012.　（査読有）

4.佐野敏行,「アメリカ中西部小都市の形成期における移動する人々--センサスと資料に基づく転居，持ち家，エスニシティの側面から」佐野敏行『人間文化研究科年報』(奈良女子大学大学院人間文化研究科)（査読有），第 26 号 97-107 頁，2011。

5.佐野（藤田）眞理子,「文化概念としての老い」『日本民俗学』266 巻,108-113 頁,2011.（査読有）

6.佐野（藤田）眞理子，山本幹雄，吉原正治，「多様化する学生層と支援者育成」<特集：大学における多様な学生支援>，CAMPUS HEALTH 47(2)，7-12．2010.（査読有）

7.佐野（藤田）眞理子,「大学における障害のある学生の支援の現状と展望」（特集：心のバリアフリー）『福祉介護機器』Vol.3, No.12，pp.9-14.　2010.（査読無）

〔学会発表〕（計　3　件）
1.Mariko Fujita-Sano,“The Role of Meals in Creating Age-Friendly Communities for the American and Japanese Elderly,” IUAES 2014, “Considering Ideas and Practices to Create "Age-friendly Communities," Chiba,Makuhari Messe, May 23，2014,

2.Mariko Fujita-Sano, “The Meaning of “Work” for the Well-being of American and Japanese Elderly People,” IUAES 2013: “Exploring Well-being in Later Life: Crossing Cultures, Crossing Borders , Manchester，UK，７ August 2013.

3.佐野（藤田）眞理子,「アメリカ人高齢者とボランティア活動の意味」国際シンポジウム：「エイジング–多彩な文化を生きる」2012 年 2 月 26 日，　国立民族学博物館。

〔図書〕（計　2 件）
1.佐野（藤田）眞理子,「高齢者」 山下晋司編『公共人類学』東京大学出版会（査読有）[掲載決定　印刷中]。

2.佐野（藤田）眞理子,「老いと生きがい」谷口貢・板橋春夫編著『日本人の一生:通過儀礼の民俗学』東京:八千代出版.pp.215-220, 2013.（査読無）

６．研究組織
(1)研究代表者
佐野　眞理子　（SANO, Mariko　）
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：80206002

(2) 研究分担者

(3)連携研究者
佐野　敏行　　（SANO, Toshiyuki）
奈良女子大学・研究院生活環境科学系・教授
研究者番号：　20196299

鈴木　七美　（SUZUKI, Nanami ）
国立民族学博物館・先端人類科学研究部・
教授
研究者番号：80298744